

SANPO

下町通信

2号

特集 西成あたり



西成あたり

新今宮から通天閣

大阪環状線の内回り、大阪駅から夕方五時すぎに乗り込むと、一仕事終えたニッカードボーカー姿の男達に出くわす時がある。男達は少しの疲労感と解放感を漂わせ、新聞に目を通している人もいれば、黙って窓の外を見つめ立っている人もいる。行き先は新今宮。通天閣が左手に小さく見え始める頃、電車はブラットホームにすべり込み、男達は他の乗客に混じり動物園前方向、東出口から西成の宿に吸い込まれるようにして消えていく。

今年に入り新今宮から通天閣にかけてよく歩いた。このあたりも「いつ来ても変わらぬ町だな」なんて言えなくなつたのは残念だが、まだまだ人の体温が残っている場所だ。無味乾燥な町歩きが続き、行き詰まった時は、ついここに足が向いてしまふ日が多かつた。人は決してこのあたりのことを良くは言わないが、一度この町に身を曝し、我が身のことや大阪について考えてみるのも悪くはない。

新今宮駅の下は、阪堺線の南霞町駅が交差している。すぐあるパチンコ屋あたり今は化粧直しされ小綺麗にはなっているが、道路の端にオッチャン達が古物を並べて売っている景色は昔と変わらない。中古の靴や古本・ぬいぐるみ・鍋・ラジカセ・ギター・A Vビデオ・テープ・古着などいろいろなものがある。人は好奇心でいろいろのものをいくが、あまり買っているのを見ることがはない。道路を南に渡ると作業服を売る大きな店がある。そ

の横手から旅館やホテルが並ぶ通りが西成警察署の方に続いている。数年前からだろうか、シティホテル風なモダンなホテルが増えたが、道を行き交う人々は、昔と変わらぬ労働者風の男ばかり。酔い潰れて歩道に寝ころがっている男もいれば、ぶつぶつと何やら呟きながら歩いている男もいる。ころんと血を流している男もいる。ここは不思議な空間だ。近年の不況のあおりを受け、何か全体に勢いはないが、夕闇が迫る頃になると裏通りの屋台に灯がともり、新参者には近寄り難い雰囲気になる。すでに顔を赤らめた男達がフラフラと通りに出てくる。

ここは基本的に独り身の男の町だ。通りにはコインランドリーや惣菜屋・弁当屋も多く、結構何となく暮らせるようにはなっている。立派な外観のホテルだが、二千元以上の個室は稀で、相場は千七百円から千八百円、中には古い旅館で入船旅館の六百円なんてのもある。新築当初は四千元ほどの値を付けていたらしいが、誰も泊まらず結局は今の値段に下がっていったらしい。

有名な西成警察署は現在移転中もうこの地区で、睨み合いはなくなるのかもしれないが、暴発する時は何処でどうなるかはわからない。この警察署のちよつと先に三角公園というだっぴろい公園がある。ここには珍しい街頭テレビが置いてあり、夕方には男達が三々五々集まり、野球や相撲中継を見入っている。このあたりだけ眺めていると三十数年前にタイムスリップしてしまう。ゴミの多い公園だが、隅の方ではワンカップ片手に談義している連中や、一人で本を読んでいる人、寝ころがっ

ている人と様々。そのうちに賭博が開帳され花札やサイコロを男達が囲むようになる。暖かくなればカラオケなんか歌っている人も見るが、おそらく昔はもつとすさまじい雰囲気支配してたんだろうと想像する。

この三角公園近くまでが労働者中心の町。すぐに天下茶屋、下町の匂いがプンプンする町になる。買物籠を下げたオバチャンやチャリンコに乗ったガキどもが増えてくる。唐突だが腹が減ればすぐ近くにある大阪ラーメンに立ち寄ればいい。ここはラーメン・ギョウザが百円の有名な店。と言っても別に人が並んでいたりと、店内を小綺麗にしてなんてことはいいじゃない。全く地元の人々の為の店。ラーメンのスープは基本的な鶏ガラと野菜でとった醤油薄味。ぶ厚いチャーシューなんかはのっていないがモヤシの横に、肉コマも少々入っている。市中の四百円くらいのラーメンの値打ちは充分ある表では奥さんが子供のめんどうを見ながら店を切り盛りし、厨房では親父さんと従業員の二人が頑張っている。

ある日の夕方ふらつと入ってラーメンを食べていた。客のなかの酒が少し入り陽気になった中肉中背の五十がらみの男が、帰りかけた小柄な年配の男に声をかけた。「ああ君なつかしいなあ、元氣だった？」どうやら二人は昔東京山谷でいっしょに働いたことがあったらしい。ぼくのテーブルの前にすわり込み、話始めた。「あの時の騒ぎで俺は捕まったさ……」「別に俺は思想たら何たらなんて関係ないんだけどさ……」：「でもずいぶん入れられて出てきた時は世の中変わってしまった



でとまどつたさ……」「君はこつちになて何年になる？」……「そう五年になるか、身体だけは丈夫にしないと」酒の入った男が一方的に喋っている。「ちよつと飲むかい」と酒を勧めるが小柄な男は「いい：いまは止めているんだ……」「と言つて飲もうとしない。心なしか手は震えていたがきつぱり断つて三角公園のほうに帰つていった。流れ者の多いこの地区、人はそれぞれ過去の持ち社会からはみ出して、吹き溜まりのようになこの地区に集まってくる。孤独と弱さをいっばい抱え。

ある日、大阪ラーメンの近くで、頭髪がレゲエのドレッド状態になったオツチャンに声をかけた。久しぶりに太陽が顔をみせた日で、上半身裸でオツチャンはシャツを、人家の板べいに干していた。「オツチャン景気どう」と声をかけると。顔をクシヤクシヤにして「アカン悪いなあ、おまけにわしはもう歳やし誰も嫌がつて使おてくれへん、怪我でもされたらかなわん」と思うとるんやろなあ……」。歳を聞くと、七十六と言う。よく顴ると顔の皺も多い歳相応の老人だった。数年前まで東京やら日本全国を放浪していたらしいが、今は西成に落ち着いている。「東京は仕事が無かつたらきつい」とこぼした。もう何日も安宿にも泊まっつてないのだろう、今は三角公園あたりで夜を過ごすという。どうして食べているのか聞くと、工事現場のあとかたづけとか、ダンボールを集めるらしいが、今、キロ七円くらいで相当きつい。老人は一人になって二十年くらい経つと

先を急ごう、なかなか通天閣までたどりつけない。今池本通りに入り動物園前一番街に向かう。このあたりは裏手に飛田遊廓を抱え昔ながらの雰囲気を多く残している。服屋や惣菜屋、それに大衆酒場丸一屋などもここにある。横にそれれば大衆演劇のOS劇場。飛田本通りの踏み切りを歩いていると、南海天王寺線が三月三十一日で廃線になり無残にも線路の視界を工事用の衝立てで塞がれているのに気が付いた。ここは昔よく写真を撮ったところ、また馴染みの景色が一つ消されていく。しかし記憶の中に街はいつまでも生き続ける。

もう動物園前まで出て来てしまった。ガードをくぐるとジャンジャン横丁、正式には南陽通商店街。寿司屋に飲み屋、雀荘に娯楽場。甘党喫茶「でんすけ」に座って将棋クラブの表を眺める。店の親父に天王寺線の廃止について話しているというや、もう二三年でこのあたりもかわるやろ、代替りするともたへんからなあ」と言う。人通りりも以前の五分の一に減って

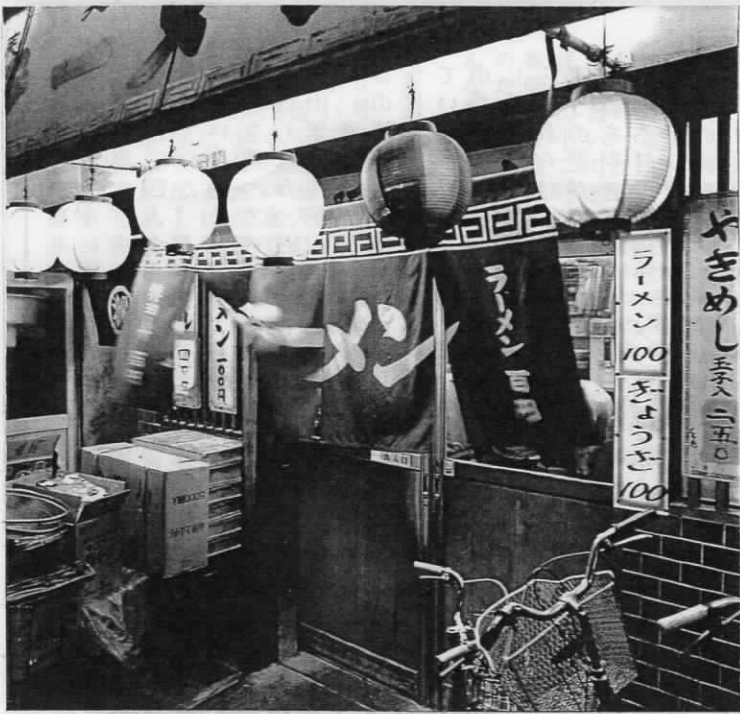
る。映画「どついたるねん」で見
た通天閣のエレベーターのシーンは
せつなくてよかった。この時代
遅れのタワーは何か悲しい話が似
合う。二十年ぶりに上空から観た
大阪の街は何故か昔より澄んとい
た。展望台から今通ってきた道を
見下ろすと、ジャンジャン横丁の
裏手に、空き地がかなり広がって
いるのに気が付いた。昔からこう
だったんだろうか、それとも再開
発の手が伸びているのだろうか？
もしそうだとすると、でんすけの
親父が言ったもう二三年というの
も真実みを帯びてくるなあ……。

ここ数年大阪はせつせと公園や地下道から浮浪者を追い出している。ビッグプロジェクトのもとに臭いものには蓋式の街づくりが今後も続けられるだろう、そんな時この西成のあたりはどんな風に変わっていくのだろう？他の町と同じようにはなつて欲しくない。少し淋しさの似合う町を残しておいて欲しいと思うのは、よそ者の甘えだろうか。

永田 収



この原稿をうち終わった翌朝の日曜日、朝日新聞の刊行にジャンジャン横丁2メートルの拡張巡り10年「人情の街やケンカ止めて」という書き出しでアンケという道幅を2メートルに広げるとの道幅が載った。あまりのタイムミスのよさに驚いた。西側を建替えるらしいから将棋クラブあたりは変わるだろうか。西と東で10年も争ったという。それによしでも巨大な空き地を遊園地やミューズマール劇場を建てるというから、まさるすけの足が遠のく場所になるのか。

[illegible]



大

阪ラーメンの
主人に聞く

●まずここで大阪ラーメンを始めたいきさつから。

若い頃九州鹿児島から出てきて、本当は牧場の仕事に憧れて北海道に行きたかったんやけど大阪で止まっしてしまっ、いろいろあつて大阪ラーメンやつてた親父に会つたのがきっかけでこの世界に入り、暖簾わけしてもろて十六年になる。だから十六年前からラーメン、ギョウザの値段はいつしよや。これは先の親父の信念みたいなもんがあつたんやけど……昔の仲間でこの信念でやつてるのは今はいないよ。

●百円でやつていきますか。

そら皆の協力が必要や、仕入の値段もお前んとこがそおいう気やでやらうちも協力するいうて……。心のつき合いでこの値が保てる、まさに人という字のように皆もたれかかってやつてるよ。

●客は百円をありがたがつてくれますか。

特にここは特殊な地区抱えとるから……三角公園で寝てるオッサン達が冬の寒い時に百円つかんで来て、あつたかいもん食べてよろこんで帰つてくれる、こういうのはうれしいで。昼も夜も客が来る、昼一時頃かいし、もたへんよ。こんな店でも税務署が来るから「お前もいつべんやつてみるかい」つていつも言うてる。でも腕がつづく限りやるけどな……。

●いろんな客が来たでしよう。

そら十六年やつてたらさまざまのもんがあるで。殴り合い、蹴り合い、わしも怪我して失明しかけたことがある。店の裏でやるんやが、おまわ

りさんにも有名で、十人くらいで乱闘があつたときもある。でもそんなことより人間の心ちゅうもんがないやつ、食い逃げとかな……わかんことでもないけど、周りのてまもあるし「わしも生活抱えてんねんでオッサン」、て言うよ。食い逃げが一番腹が立つなあ。

●マスコミなんか来るでしよう。この前でもある新聞の記者が来ていろいろ喋らしといて、その後全く音さたなしや。テレビも来るけどあいつら遊びにするやろ、こっちは真剣に生活かけてやつてんやからバカにすなちゅうねん。あんたは運がええよ、たいていは断るけどなあ。

●今の客についてどうですか。

このへんにいる人はいろんな事があつて集まつてゐるわけで、ラーメンでも食つて酒の一本でも飲んで、という人達が多いんだよ。けど、わしは酒飲む前に食べ言うし、風呂にも入れ言う。店で女房もあんまり酒ばかり飲んでるオッサンには止め言う。皆、酒と博打や、金あつたら飯喰え言いたい。

結局淋しい人が多いんだよ、家族に会えんし、家族持つても皆独身みたいなもんや。朝、酒飲んでない時彼らの素顔見るやろ、そらまともや、けど飲んだら人が変わる、あれが怖いねん。……しかし、ようこんだけ入つてくれてありがたい思うてる。わしは汚いオッサンでも敬遠せえへん。ここに来る人はええ人ばかりや思うで。仕事場でボロくそ言われて、それで酔つ払つて「おれは客やどー」つて言いたいんやろ。もう慣れたけどね。



僕の露地裏

この写真の中央に一人の女の子が座り込んでいる。彼女はみなしごである。この写真を撮ったのは十年ほど前の一月一日であることだけは覚えていて。場所は大阪市西成区、地下鉄動物園前を上がりジャンジャン横丁の南の入り口にあるパチンコ屋の景品交換所前。景品を交換し終えたおっちゃん達から、余りのチヨコレートを投げてもらった「ありがとうございます。」とお辞儀をしてチヨコレートをリュックサックの中にしまひ込む。

「ひとりか。」

……………

「お母ちゃんやお父ちゃんは。オラン。」

「お腹減ってるか。」

それから後の事はあえて書かないでおく。とにかくこの時の彼女に夢や希望はない。腹が減ったらチヨコレートを食い、水を飲む。

街について考える時、僕は喜びと悲しみを切り離せない。変化していく街に対して、懐かしむだけでは気のすまない現実がある。決して消える事の無い僕の中の露地裏である。

アキ地はからっぽである
からっぽは無ではない

そこには光が集まり
草がはえ水たまりがある
何処からか子供がやって来て
友達を呼ぶ大きな声がひびく

アキ地は自然である
自然は確かではない
そこにはたった一つの約束があり
言葉ではなくマジックがある
子供だけが座れる椅子があり
大人になるとはみ出してしまふ

アキ地は記憶である
記憶は過去のものではない
それは今も光を放ち
心の中に雨を降らせる

子供の頃天に投げた石ころが
何処に落ちたのか？
未だ見つからないのである

写真・文 加藤 一

西成の止まり木

エルトルル小川

先日廃線になってしまった南海電車天王寺線の踏み切りを渡ってすぐの露地裏に、今は大衆演劇の小屋になっている「オーエス劇場」がデンと構えている。昔は洋画の二番館だった。この映画館に初めて入った日のことを忘れることが出来ない。切符売場の穴（へ）というかネズミの通路（う）か）にお金を差し出すと、指がニユツと出してお釣りと入場券が戻ってくる。現在のロイドショー館の切符売場はどこもガラス張りの中が丸見えだが昔はどこも売場にはサテンのような布地のカーテンが下りていて、何か秘密めいたものがあつた。で、ドアのない入り口を入るとガラーンとした空間がある。椅子もないのでロビーとは言いがたい。プーンとトイレの臭いが漂ってきた。場内への入り口は？とキョロキョロするが見当らない。後から来た客は皆トイレの方へ向かっていく。思わずその後へ続いていくと男性用トイレの奥にドアがあり、何とそこから

コンクリートの上に直に硬い木の椅子がへばりついていて、これに座って三本立を見るのはつらかった。「オデッサ・ファイルド・パンチ」の超強力三本立。映写機が古いのかスクリーンが砂嵐に遭つたようにボヤけている。それにジュースや菓子売場にあるのだ。だから上映中も客席の後部だけがポツと明るい。おぼちゃん（？）が眠そうに番をしていて。酔っ払つたおっちゃん（？）が画面に向かって「早う逃げんかい！」俺の前のおじいさんは熟睡中。タバコは客のほぼ全員が喫っている。ゼエゼエ。映画館の原型を見る思いがしたが、学生・老人割引があつて、十二時までに入ると百円くらい安くなる。当時一般四百円程だったか。でも早過ぎてもしけない。朝一番の上映はどう言うわけか、作品の途中から始まるのだ。従業員（？）の勤務時間に合わせて終了時刻を調整しているのか。新世代（？）の映画館に特有のこのシステムの理由、いまもってよく分からない。

その名を「トビタOS」と言つたこの映画館の名残りは昔のまま現在の芝居小屋の入り口に残っている。ポスターの代わりの色あざやかな幟（しほ）に飾られて：

(了)



西新宿番外地通信

サンボルノ川村

うららかな晩春の風に誘われて、ひよっこり街へ出れば、途端に腹が立つ。

ええい、忌々しい！どうして、こんなに人が多いんだ！ウジャウジャと、どこから湧き出してきたとしか思えない。ええい、どけどけモタモタしてやがると、ブツ飛ばすぞ。苛立ちが一瞬、殺意めいたものに変わった。ヤバイな。この男、凶暴につき、だ。新宿よ！ところが、実際は、すれ違う人と肩がぶつからないよう、こちらから先に体をかわし、前を歩くやつの踵を踏まぬよう気を配り、時にスキップしながらリズムを整えて、と、人知れず、へんてこりんな歩調でもって十メートルごとに青息吐息といった有様なのだ。

それでも、無事にすめば、まだいい。紀伊国屋の前あたりで、ため息まじりに四角い空を見上げる暇もあらばこそ、ガツンと若い男がぶつかって、何も言わずに立ち去っていく。振り向いた拍子にOL風のハイヒールでつま先をふんづけられ、ギャツと思わずのけぞれば、そこはオパチヤンという名の脂肪の塊。「す、すいません」

なんて言ったって、もう遅い。先方は、失礼しちゃうわね、という顔で眉間に皺を寄せ、鼻の穴をおつぴろげていらつしやる。

寺山修司だったっけなあ、青年の不幸は部屋でじっとしていられない

ことから始まる、てなことを言ったのは。こういう時は、別段、哲學的問題なんてものとは関係なく、単純に我が身の不幸を嘆きたくなる。だーから言わんこっちゃない。今からでも遅くはない、西新宿プリズンアパートの独房201号に舞い戻り、おとなしく桑原譲太郎でも読んでいようか。とりあえず、タイトルはいいぞ。『アウトローは黙って狂う』ってんだ。でも、そうじゃないでしよ、あなたにはこれ、と可愛いあのコが差し入れてくれる本は、半村良の『新宿馬鹿物語』だったらしい。

それにしても、どうして、こんなに人が多いんだ。昼日中からいい若いモンがブラブラしやがって。他にいくとこないのかよ。もうちつと気の利いた遊びができねえのかよお：と、年中ブラブラしている三十男は、自分のことを棚に上げつばなしにして、四方八方にめくじらを立てる。

中には歩道から大きくはみ出して：通りのド真ん中でギターをかき鳴らしたり、スケボーを乗り回したり：抱き合ってキッスしたりしているカップルもいる：？！

そのはずである。例の、歩行者天国というやつなのだ。うかつにも、日曜と気づかずに、のこのこ出てきたのが間違いのもと。窮屈な天国で浮かれ騒ぐのは勝手だが、個人的には全くの地獄だ。すべての日曜に呪いあれ！

なんだかしらないけど、見るもの聞くもの何もかもけしからん！という発作的逆上忿懣やるかたなしビームを連射しつつ、新宿通りを四谷方

面へズンドコ歩いて、伊勢丹を左手に明治通りを渡ると、ウソみたいに人通りが少なくなる。スカラ座の裏手、末広亭あたりなんか、人影もまばらで、ひっそりかんとしたものだ。この辺をうろつく度に胸がチクチク痛む。ひとつは、スカラ座の隣にあった由緒正しきロマン劇場がなくなつてしまったからだ。今は跡地にスカイブルの壁面もケバケバしく「フィールド」とかいふスポーツ用品専門のビルがおつ建っている。都庁の移転からんで地価高騰のあおりでもくらったのか、確かに老朽化していたし、客足も落ちていたのかもしれないけれど、新宿からロマンが消えたのは返す返すも惜しい。三丁目でいうと、丸井ヤング館隣のロ

ーヤル劇場も数年前に姿を消している。上映環境は今イチ良くなかったけど、それでも新宿のド真ん中に洋画の名画座があるのは頼もしくもあり、嬉しいものだったのだ。映画館の減少を嘆き始めたらきりが無い。それこそ、亡くした子の年を数えるようなものだからな。でも、しかし、やっぱり、だ。消えたのは、はたして劇場だけだろうか。本末転倒と笑わば笑え。ぼくは断固、言いたい。

映画館が消えれば街も消えてしまふんだ！映画がなければ、この世は闇だ。それは確信の闇だ！

いかな。こう、たて続けに発作的逆上忿懣やるかたなしビームを発射しては。昼めしもまだだし、身がもたねえ。

で、もう一つの胸のチクチクはというと、昼めしの問題にもからんでくるが、故あって、大の男がカウ



焼き鳥の「海老忠」の健在ぶりを確認（だけで、暖簾をくぐれぬのはチト淋しいが）し、再び三丁目の交差点へ出て、人通りを避けるつもりで、新宿駅の南口方面へ回る。と、なんたることか、歩行者天国どころ

じやない、こちらはゾロゾロゾロ
ロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾ
ロ：蟻シコの大行列みたいになっ
ているではないか。あっちこっちに縄
張りしてあって、制服姿のガードマ
ンみたいな青年たちがハンドマイク
を片手になにやら怒鳴っている。大
行列は圧倒的に男達だ、ざっと見た
ところ、中高校が三、青年六、残り
は女が一といった割合で、女はほと
んど二十代だろう。今だにポディコ
ン系の派手めなやつが目につく。聖
人君子の本性として、どうしても、
そちらへ目が泳いでは…落ち着き…
落ち着いては…また泳ぐ。

甲州街道沿いをソロソロ歩く蟻ンコたちの行く手を見て納得した。行列は五階建てぐらいの白っぽいビルに吸いこまれていく。壁面にはJR Aを形どった緑のマーク。「ウインズ」と呼ばれる場外馬券売場なのだ。またしても、うかつなのは、このぼくで、本日は第百七回の天皇賞なのであります。

ここまで来て引き返すのも業腹、

ええいままよと、ほくも行列にまぎれこむ。ウソだらうウソだらうと自問しつつも、ヤケクソ半分、しだいに屠所の羊の如く、ガードマンの青年たちには追い立てられて、その建物に入ると、あたかもそれが予定の行動であるかのように、みんなについて階段を上がり始めていて……。

気がつくとき、葬券所のガラスの向こうにブスツとしたオバチャンの顔がある。あわわ、えーと、可愛いあのコの誕生日はいつだっけ……なんて出し忘れの証文広げような塩梅で思わず「5-16-1」と叫んでしまう俺は何者なのだ。

大穴狙いもいいところで、絶望の二字、口にするのも愚かなれど、もし来れば、あのコとの行方定かならぬ恋路にも、また一条の光さすことがあるかもネ、と一縷の希みに縋つて山田屋の片隅でタンメンをすすり、テレビを見ながら静かなる声援を送つたものの、結果は：すでに皆さん御存じの通り、惨敗であつた。中盤戦まではメジロバーマーが引つ張つたからドキドキしたが、直線入り口から大方の予想通りマックイーン（武豊）が抜け出し、最後はピツッリあとをつけていたライスシャワーが躍り出て、そのままゴールが躍り出た。このレースの売り上げは阻止された。このレースの売り上げは四十四億九千三百五十一万三千三百円で新記録を達成。その中の三千円は他でもない、ぼくがほたいいたなけなしのカネだ。実を言うと、全部馬連で千円ずつ三点買ひしたのであれど、５－６の他は何か、一身上の都合により、教えてあげません。それにしても、ライスシャワーは強

米の雨は偉大なり。

行き当たりばったりで馬券を買うなんてどうかしてるぞ。一事が万事お前の人生はすべて行き当たりばったりの出たとこ勝負じやないのか。；しきりに反省しながら山田屋を出ると、目の前に燦然と聳えたつのは我等が新宿昭和館なのである。ええい、行き当たりばったりで何が悪い青年は、しかし、荒野をめざすのではない。行き場のない、この哀れな男は、とりあえず、映画館の中へ半は追われるようにして逃げ込むのである。いわば緊急避難だ。行き当たりばったりじや聞こえが悪いからな青年は屁理屈こきながら月に数回、いや十回前後、時として三日に上げず、下手すると毎日かかさず緊急避難したりすることもあるらしい。人はそれを「ピョーキ」と呼んで簡単に片づけたがるが、今はそういうがさつな議論につき合っている暇がない。すでに開幕ベルが鳴り響いているのだ。

映画館の暗闇を子宮にたとえて、何か本質をついたみたいな顔しているやつは、実に鼻持ちならぬギザな野郎だろう。…だろうとは思ふが、ぼくにも一部、そうした摩訶不思議な感覚がある。そこから生まれてていずれば、あの手この手で、そこへ帰つていきたいような、また、どんなにジタバタあがき、もがいて抵抗してみたところで、結局、そこへ吸いこまれていつてしまうような、恐怖と平安、愛と憎悪、至福と残虐が渾隣り合わせ、否！ そのすべてが渾然一体となつているであらう、永遠に蠱惑的な闇に広がる迷宮。あつさり、その迷宮こそぼくの宇宙だとい

言い切つてしまいたい気もするが、話を光年のかたへもっていつてしまふ前に、ぼくは、今、いる、この新宿昭和館という素敵な劇場こやの暗闇のなかで、ほんのひととき、カッドウ屋さんたちが寄つてたかつてこしらえた映画という夢を夢みることにしよう。

今週のラインナップは「日本俠客伝」「網走番外地・大雪原の対決」「昭和残俠伝・人斬り唐獅子」。高倉健主演、怒濤逆巻く、血風死闘の三本立てだ。

…さて、夢さめて、また見る夢もある。突然の強風にふらつきながらも、我が独房201号へたどりつくまで、十分ちよつとのそぞろ歩きも満更ではない。で、駄句ひとつ。

春あらし健さん見たり昭和館
(了)



尼崎を散歩する

エルトル小川

尼崎と聞いてどんなイメージが湧くだろうか。阪神工業地帯の中心地。庶民的。まずそんな言葉が出て来る。俺にとって尼崎は初めて街歩きを始めた場所の一つだ。だから格別の思い入れがある。何かゴチャゴチャと面白くもある。何となく、と好奇心から見て阪神尼崎で下車したのは、73年頃だった。駅前広場で鳩が舞う中を抜け、神田商店街をゆつくりゆつくり進んでいった。出屋敷に近づく。三和市场を始めとする商店街、市場がクモの巣の如くタコ足のように伸びている。冷やかした後、近くの喫茶店で休憩し、出屋敷で電車に乗って帰る。いつもこのコースだった。このコースを何十回回ったのだろうか。足のアブラがアスファルトに沁み込むくらい歩いた。日頃の間人関係が煩わしくなったり元気が出ない時はここへやってきた。下宿で夕食をとったあと何か空しいものを感じ、わざわざ電車を乗り継いでやって来てボートと歩くうちに落ち着いてきて、また下宿へ戻ると夜の十二時だった、なんてことも数限りなくある。包容力のある町なのだ。フトコロの深い町なのだ。そんな町をもう一度散歩してみた。

長い間気になっていた町名がある。

と同時に淋しい気持ちになってくる。城下町の雰囲気を取り去り、工業都市としての貌を前面に出さざるをえない事情があったんだろうか。その43号線もながい商店街を潰して出来たと教えてくれたのは地元のおじさん。「昔はもっと賑やかやっつたんやが」。その名残りは西本町中央市場跡でかろうじて感じとれる。一遍行つてごらんよ。足が動かなくなるよ。ジーンとくる木造建築だ。ここから汐町にかけてはなつかしい家並みが続いている。日が暮れかけてから歩くと特に楽しい。家々の台所から夕食の煮物や焼物の匂いが漂ってくる。みんな生活してるんだなあ。中国の人が切り盛りしてる餃子の「満州亭」もここだ。包子をもち帰りにして隣の寺町へ。久しぶりにきてみたら通りがえらく整備されていてビックリ。あんまり人工的に作ら変えられていて行く気がしなくなるのは俺の悪い癖だ。駅高架と神田商店街のあいだに延びる裏道は昔の雰囲気そのまんま。ストリップ、キヤバレー、居酒屋が猥雑に自己を主張している。俺のよく行った正宗屋も健在だ。いいなあ。落ち着くなあ。心が自由になつていくのが分る。街が人を作り、人が街を作る。人が千差万別である以上、街も二つとして同じものはない。尼崎を知るには、ここを歩く他はないのだ。商店街の北側では映画館でお世話になった。大傑作「さびしんぼう」や黒沢明特集でお世話になった尼崎東宝、今は無きピンク映画の日本劇場、今もあるピンクの尼崎パレス。どれも古びて一時代前の雰囲気を感じさせていたなあ。そしてそのまま吸い込まれるように三和商店街に入っていく。活気がある。豊富な品物。今でも歩くにワクワクする。変わるものと変わらぬもの。そんな流転のなかで、何時までも残つてほしいのが市場だ。

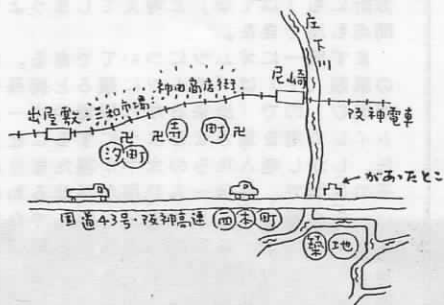
今の日本はそれを捨て去ろうとしている。愚かで危険で情けない話だ。このあたりに名前もないに等しい商店街があちこちにあり、それぞれが独特の匂いを持っている。戦後の闇市を想像させるような、作業服ばかり並べている通がいたり、韓国料理の惣菜を山盛りしてたり、照明があたりすぎる。目も眩むような照明の下でイキのいい魚がピチピチはねていて店が続くかと思えば、こんなんでやつていけるんだらうかと心配になる程間口の狭い雑貨店が通の外れに佇んでいたり、その横に人をワッと驚かすように別の市場の入り口が開いていたりする。

俺たちはそこで方向感覚を失い、迷うしかない。それがここでの正しい歩き方である。買物でリュックが塞がり、両手が一杯になつたら体内の方向感覚で抜け出る方角を考えれば良い。抜け出られなくなったら？そこには座り込めば良い。寝転べば良い。この座り込むというのが好きだ。どこでも所構わず腰をおろす。すると視線が低くなつてその町の表情がよりクッキリと見えて来るのだ。しばらくじっととそうして周囲を見回しているのだ。買い物客のおばさんたちがジロジロ見られるがマア、それ位仕方ない、我慢しよう。子ども頃の目の高さを獲得するとまた町が新鮮に感じられて楽しい。そんなこんなで市場の迷宮を抜け出ると、出屋敷駅へと続く商店街が二本伸びてくる。手前の広場に立つと俺はフットとため息をつく。「仁義なき戦い」で菅原文太が暴れ回ったファーストシーンのセットとここがそっくりなんだ。いや、「以前は」が悲しい。ズラリと軒を並べて職もつ屋と立ち呑みと屋台のめし屋があり汗と熱気と殺気がみなぎっていた。

一瞬にしてここは俺の原風景となつたのである。大衆喫茶玉一。大衆食堂というのとはどこでも見かけるが大衆喫茶とは。屋根（アーケード）ではない。のある方の商店街に踏み込むと、人は皆詩人になる。ここだけは昔と変わつてない。お好み焼き屋、駄菓子屋、銭湯、靴屋が二十年前と同じ顔で迎えてくれる。その短いトンネルを出ると駅前再開発ですっかりよそ行き表情をした出屋敷駅ビルが冷たく俺を睨んでいた。どこの駅も高架になつていく。車の我儘と賢沢に押されて公共交通である筈の電車が高架に追いやられ、各地の風景を台無しにしている。逆じゃないか。道も踏み切りも昔のままにしておけ。そうすれば人々は車の不便さと無意味さに気付く。電車やバスに戻つて来るだろう。見せ掛けだけの美観や快適さを手に入れた代わりに人々が失つたものは大きく深い。今の出屋敷駅前の状況は悲惨といつていい。かつて電車を降り半地下の改札を出て地上に立つたときの手応えは、無い。そんな駅前に涙を流れる様にして残つてるのが大衆演劇の出屋敷天満座だ。英研二郎劇団が公演中。以前は尼日栄につかつたという映画館だった。特集上映のオールナイトをやつていてよく通つたなあ。無念の思いにばかり胸を揺さぶられ、立呑み屋の一杯で心を癒す。そして考える。俺にとつての尼崎は尼崎駅と出屋敷駅との間に尽きるのだな、と。

この町がなかったらどこで心を解き放つていただろうか、とも思う。酔いが回つてきた。そろそろ帰ることにしよう。夕闇が無味乾燥な新しいビル群の輪郭を消し去り、代わりに家々の灯りが街に暖かさを蘇らせてくれる。昔のままの街の表情を一時垣間見たような気がした。

(了)



横丁のおじさんのはなは、
 すぐ海へ、築地漁師の船は
 工町、街があつた。手前西大
 本町商店街が、戦後空襲で跡
 焼けてしまつた。線が走るこ
 地を4、5号線が走ることに
 つた。江戸・明治の頃、この
 また江戶、明地のあたり、
 あたり、男衆の築地、あたり
 新地、船で遊びに行つたとい
 こただ。

「ヘップサングル」

その仕事の次は同じヘップ関係で、今度は芯を足型に裁断する仕事で、ある日、トラックで大きな機

ハップサンダルという名前はオードリー・ハップバーンが映画「ローマの休日」で履いていたサンダルに似ていたから、この名前がついたと聞いたことがある。優雅な謂われだけど、それを作っているのが貧しい生野の下町に住む在日韓国・朝鮮人たち。今は生活が豊かになったから仕事を手伝う子どもはほとんどいないだろうけど。(金敦子)

中山 麻由美

私は老人ホームで、4ヶ月ほどアルバイトをしていたことがある。老人ホームといっても、特別養護の方なので、入居者のほとんどが、寝たきりか重度の痴呆症だった。様々なタイプの痴呆の人々がいて、私にはまるで人間動物園のように感じられた。

そんな中で、アルバイトといえども仕事内容は、オムツ交換や、入浴・食事・トイレの介助など職員同様だったので、自然と老人問題に関心を持つようになり、同時にホームの方針にも「はてな」と考えてしまうような疑問点も出てきた。

まず第一にオムツについてである。ホームの原則(?)は「オムツに頼ると痴呆や老化が進む」ので「出来るだけ尿器やポータブルトイレで用を足させるようにすること」だった。しかし老人たちの大半が寝たきりか車椅子の生活で、自分一人で用が足せるわけがない。その時はコールで寮母を呼んで介助してもらおうのだが、寮母の方も他の雑用が多くて、呼ばれても間に合わなかったり、逆に寮母に氣を使って、自分で済ませようとして無理して転倒したり、出そうな錯覚に悩まされて、夜もろくに眠れず、日中もしきりにコールするノイローゼ気味の老人もいたりして悲惨な状態だった。

私は専門的な知識を学んでこのアルバイトをしているのではない、だからこんなことを言っているのかどうかかわからないが、「今更オムツが取れたって、寿命が延びるわけでもないし、それに嫌がる人に強制的にオムツを

させるのではなくしてもらいたがっている人から無理に取り上げるのだから、かえって精神衛生上良くないんじゃないか」としか思えなかった。こんな私の考えは、間違っているのだろうか?



編集後記

通天閣は正確にいうと浪速区にあり西成区ではない。しかし今回の散歩の流れとして通天閣に上がって終わりにしたかった。ちょっと急ぎすぎて無理があったかもしれない。また機会があれば何度でも取り上げてみたい。しかしいろいろ知識として詰め込むよりも、一度行ってみるのがいい。開高健「日本三文オペラ」にもでてくるジャンジャン横丁を昔からのサイズで通行できるのももう少しかもしれない。ある知り合いは夕方通天閣にのぼり大阪の街を眺めビールを飲むのは最高だと言っていた。それもまた良し。

1993・5・20

編集・発行・責任者

西宮市田代町16-3 201

☎ FAX

0798 66 4074 永田 収

無断複写非営利にかぎり可

本紙はコピー代実費として百円いただきます

SANPO

下町通信

2号

「映画の中の街-大阪-」 その①

川島雄三という映画監督がいる。四十五歳の若さで夭折するまでに50本の作品を残した。内容は、風俗喜劇から重喜劇・メロドラマ・歌謡ドラマ・人間劇・文芸物と多岐にわたり、それぞれが独創的かつ実験的な試みに満ちており、今なお燦然と輝き続けている。「幕末太陽伝」をベストに挙げる人もいようし、「しとやかな獣」を推す人もいるだろう。先日、十三のアップルシアターで特集上映された十作品を総チェックして、改めて全作品に通底するニヒルさ孤独感を確認した。

ここで書きたいのは、それら傑作群の内容についてではない。そこに登場するロケ地大阪についてである。例えば、宝塚映画作品「貸間あり」の夕陽ヶ丘。遠景に通天閣。難波方面に唯一聳えるビルは高島屋か。1960年前後の大阪がそこにある。身を乗り出して見ないではいられない。乙羽信子と淡島千景(ボクのいちばん好きな女優の一人)が中之島の水晶橋のうえで対面している。背景にはレンガ造りの裁判所。…オレ、この橋を毎日の通勤時に歩いているんだなあ、と思うと訳もなくグッと来た。そして阪急阪神前の大交差点。今では不粋な排気塔もどきが占拠しているがこの映画では広々としてゆったりした空間を市電が走っていた。70年以前を知らない俺にとって市電は夢のなかの乗り物だ。京都の市電で追体験したにすぎない。しかし京都はあくまで京都だ。大阪の市電に乗りたかった。歴史を知らない俺は、あの愚劣な万国博によって地下鉄が張りめぐらされ、市電が抹殺されたのだと決め付けている。映画のなかで人々はのんびりゆったりと、今の阪急

阪神前を歩いている。今、俺たちは次々と地下へ吸い込まれていく。「大阪は全国で一番地下街が発達した町です」と当局は言う。よう言うよ。裏を返せば人々が地上から地底へ駆逐されているだけのことではないか。車優先の思想がここにある。歩道橋と同じ発想だ。「なんば東宝」前の雑踏を詐欺師の藤木悠が走る。道頓堀の「天牛書店」に逃げ込む。鰻のいづもやの看板が見える。制服の大学生、年配の和服姿がめだつ。ビルは少なく、商店が軒を並べる道頓堀。空がやけに広い。淡島千景が個展を開いた心斎橋。アーケードがない。するとこれは裏通りか。車も少なく歩きやすそう。ワクワクする。北新地の「エンゼル」あたりに当時の喫茶店の雰囲気が残っている。58年の「暖簾」も大阪商人の話だ。セットもあるがロケもふんだんに出てくる。淀屋橋付近のロングショット。広い!御堂筋。歩く人が小さく見える。中央大通の高架に閉じ込められる前の船場も見た。瓦屋根の家々から活気に溢れた声が聞こえてくる。大阪ってこんなに魅力的な町だったんだなあ。川島雄三に感謝しよう。アップルシアターでは秋に川島雄三特集第二弾を予定している。なにはさておいても駆けつけねばなるまい。

エルトール小川

先日仕事の関係で、尼崎の下町にある「喜楽苑」という特別養護老人ホームに行った。なんとこの老人ホームは痴呆の老人を抱えているにもかかわらず、門戸は開けばなしで出入り自由。もちろん老人は町を自由に徘徊できる。おまけに集団で居酒屋に行ったり寿司屋に行ったり楽しんでいる。職員も同伴で行くのだが、できるだけ老人の意志を尊重して行動を無理に規制はしない。全く以ていままでの老人ホームのイメージをくつがえされてしまった。しかしこんな老人ホームは日本にそういくつも無い。たいていは寝かされたきり老人になり自由を奪われる所がほとんどだ。現代人は、夢々人生の終わりにいい思いをしようなんて考えないほうが利口だ。

さて、中山さんが行ったバイト先「オムツはずし」を敢行しようとしているのはいいが、職員の認識が足らなければかえって危険であるという例が。自分が老人になりどうしようもなくなり、ここだったら入ってもいいなんてホームはあるのだろうか?まあまずそんなぜいたくが許されないほど老人だらけの社会になることだけは確かだ。(永田)